

大阪大谷大学

令和二年度 入学試験問題（一般入試 中期）

国 語

注意事項

- 一 問題用紙は、全部で八ページです。解答用紙は一枚です。
- 二 解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。
- 四 問題用紙は持ち帰ってください。

□ 次の文章は水村美苗みなえの小説『本格小説』の一節である。主人公東太郎あづまは貧しい青年で、「私」の父に世話になって仕事を  
得ている。その彼がダンスパーティーで一人で座っているのを、「私」が見かけた場面である。読んで、後の問に答えよ。（設問  
の都合上、省略した箇所がある。なお設問に字数制限がある場合、句読点等はすべて字数に含む。）

マイクからの声が再び響いた。

今度かかる曲が最後のテンポの速い曲である。このあとにシヨウシンa正銘の最後の曲がかかるが、それは静かな曲で、シヨウ  
メイbが暗くなった中、夫婦や恋人同士が頬をよせあい身体をすりあわせて踊ることに決まっている。その最後の曲に東太郎を誘  
うダイタンcさはなかった。

——あたし、誘ってみる。

気負って宣言するとヤジさんキタさんに背を向けた。そうして高いヒールを履いた足で部屋を小走りに横切り、不機嫌そうな  
顔を見せている東太郎の前に立つと、踊りましようかと誘った。

——僕は踊れない。

東太郎は硬い表情を見せた。踊れないんじゃないのでしょ、と言おうと思ったが、親しくもない男にそんな  
ことを言えるような歳ではなかった。私は芸なくくり返した。

——踊りましよう。

東太郎の眸ひとみは私の眸を射た。冷たい眼つきであった。

——踊りましよう。

頬が燃えるのを感じながら私は言いツノdった。そのとき音楽が大きくなかった。

——最後の踊りですから、踊りましよう。

私は少し声を上げた。彼から見れば、父の権威を借りて強制しているのと同じであつただらう。

あのとき自分がなぜそんなに執拗しつようだったのか今考えてもよく判わからない。酔いに煽おほられてさまざまな感情がコンゼンと胸の中を往来していたにちがいがなかった。そこにはまず若い娘特有の自惚うぬぼれがあつた。若い男が自分と踊りたくない筈はずはないという自惚れである。へ 1 へ その自惚れ自体に若い娘らしい優しさがなかったわけではない。人中にあつて男が一人焦燥感を内寄せ淋さびしく孤立しているのが、思わず魂があくがれ立つように哀れに思え、何とか世の中との繋つながり回復できるように仕向けられれば、とそんな風に考えたのである。へ 2 へ 東太郎が私の申し出を拒絶し続けるうちに、私の心にはまったく別のものが生まれてきた。③それを何と名づけるべきであらうか。それは拒絶された怒りであり、その怒りは、逆に相手を傷つけたい、虐めたい、貶おとしめたいという、邪悪なものに瞬間のうちに転じた。

私は息を止めて傲然と彼の顔を見据えた。

おまえは私と同じ若さでありながらこの未来のないみじめで卑小な日常に閉じ込められ、小さく、低く、暗く、怨念に埋没している。それにひきかえこの私がいかに朗らかに、いかに天高く飛翔ひしやうしているか。おまえと私となんと遠く距ひだたっていることか。そしてこれからいよいよ何と遠く距たっていくことか……

確かなのは東太郎が私のサディズムを一瞬のうちに感じとつたということである。

梃てこ子でも動かないという風に坐っていた彼はつと立ち上がると私を促した。あれはスイングというのか、それともジターバツグ、日本語でいうジルバなのか、私の身体はふいに彼の腕の力で恐ろしいほどくるくと回り始めた。何かを堪えているのが硬くこわばった身体全体から私を罰するように伝わって来る。私は恐ろしさと驚きとで息もつけなかった。自分の執拗しつようだったのを謝るべきかどうかが頭の中でぐるぐるめぐるうちにふいに曲が終わり、腕を解かれた私は支えを失った人形のようにふらつく足取りで部屋の隅に退いた。④もとの席に戻る気にはならなかった。

東太郎は部屋の反対側でネクタイをゆるめて坐つた。

ヤジさんキタさん：同席している知人二名のあだな

問一 二重傍線部 a のカタカナを漢字に直せ。

問二 実は「私」は東太郎が踊りが上手であることをすでに聞いている。本文中からそれがわかる言葉を、二十五字以内で抜き出して答えよ。

問三 ダンスに誘ったことを、東太郎はどう受け取ったと「私」は考えているか。本文中からそれがわかる箇所を、十五字以内で抜き出して答えよ。

問四 傍線部①「さまざまな感情」とあるが、ダンスに誘いかけた当初の「私」の感情について、本文中の言葉を用いて八十字以内で説明せよ。

問五 空欄へ 1 〽と 2 〽に入る最も適当な語を、次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- |   |   |       |   |        |   |       |   |          |
|---|---|-------|---|--------|---|-------|---|----------|
| 1 | ア | だからこそ | イ | なんとなれば | ウ | それでいて | エ | あいにくなことに |
| 2 | ア | だが    | イ | だから    | ウ | そして   | エ | あるいは     |

問六 傍線部②「私の心にはまったく別のものが生まれてきた」とあるが、この感情の変化について、最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ダンスの実力を見せたくてもその機会が得られない東太郎を、「私」は助けてあげようと誘ったが、冷たく拒絶されて彼の気持ちを理解できずに困惑している。

イ 華やかなダンスパーティーになじもうとしない東太郎を、それまでかわいそうに思っていたが、その気持ちが伝わらず、「私」には逆に彼を見下す気持ちが生じる。

ウ 上手に踊らなければと焦っている東太郎をひそかに応援する気持ちが、それまではあったが、彼に失望した「私」は一転して彼の欠点を次々と並べ始める。

エ 踊りに加わろうとしてそれができず、焦っている東太郎に対する同情が、この時点では感じられるが、彼のみにじめさに気づいた「私」は次第に冷淡になってゆく。

問七 傍線部③「それを何と名づけるべきであろうか」とあるが、「それ」を簡潔に言い換えた語句を、本文中から七字で抜き出して答えよ。

問八 傍線部④「もとの席に戻る気にはならなかった」とあるが、この時の「私」の気持ちについて、最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分よりもはるかに上をゆく東太郎のダンスの実力を思い知らされ、さきほどまで彼に対する優越感にひたってい

た自分の態度が恥ずかしくなった。

イ 東太郎に対する感情が、哀れみや同情から、強い怒り、一転して賛嘆へと、短時間に変化したので、気持ちの整理がつかなくなった。

ウ 東太郎に対して偉そうな態度をとっていたが、ダンスを通して、彼が自分で押し殺していた感情の強さを知り、それに圧倒され、呆然ぼうぜんとしてしまった。

エ 東太郎に場違いな態度をとったことをどう謝るべきか、真剣に考える余裕を取り戻さねばならず、しばらく知人たちのいる席に帰る気分にならなかった。

問九 作者水村美苗は夏目漱石の未完の小説の続きを書いてデビューした。夏目漱石のその未完の小説とは何か。漢字二文字で答えよ。



〔二〕 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の都合上、原文の一部を改変している。なお設問に字数制限がある場合、句読点等はすべて字数に含む。)

① けしからず物ごとにははふ者ありて、与三郎といふ中間に、大晦日②の晚いひ教へけるは、「今宵はつねよりとく宿にかへり休み、あすは早々おきて来たり門をたたけ。内より『たそや』と問ふ時、福の神にて候とこたへよ。すなはち戸をあけて呼び入れん」と、ねんごろにいひ含めてのち、亭主は心にかけて、鶏の鳴くと同じやうにおきて門に待ち居けり。

案のごとく戸をたたく。「たそ、たそ」と問ふ。「いや、与三郎」と答ふる。無興なかなながら門をあけてより、そこもと火をともし若水を汲み、羹をへ1〜ども、亭主顔のさまあしくて、さらに物いはず。⑦ 中間不審におもひ、つくづく思案しゐて、宵に教へし福の神をうちわすれしを、やうやう酒をのむころにおもひ出し、仰天し、膳をあげ、座敷を立ちざまに、「さらば福の神で御座ある。おいとま申し参らす」というた。

(安楽庵策伝『醒睡笑』による)

いはふ…縁起をかつぐ

中間…使用人

無興なかなながら…はなはだ不愉快であるが

羹…雑煮

問一 傍線部①「けしからず」の、本文中の意味として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 恥ずかしいほど      イ 愉快なほど      ウ 許せないほど      エ 異常なほど

問二 傍線部②「晦日」の「みそか」以外の読み方を、ひらがなで記せ。

問三 傍線部③「つねよりとく」を現代語訳せよ。

問四 傍線部④「たそや」の「た」を漢字で記せ。

問五 傍線部⑤「すなはち」と傍線部⑥「ねんごろに」の、本文中の意味として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

⑤「すなはち」

- ア 確認して
- イ そうすれば
- ウ その後で
- エ すぐさま

⑥「ねんごろに」

- ア 念を入れて
- イ わかりやすく
- ウ 打ち解けて
- エ 繰り返して

問六 亭主が中間与三郎に教えた言葉の中から、元日の早朝に与三郎に言わせるはずだった言葉を、六字で抜き出して答えよ。



問七 空欄へ 1 へには、「すえる」という意味のヤ行下二段活用の動詞「すゆ」が入る。

(i) 「すゆ」を適当な形に活用させて記せ。

(ii) その活用形は何形か、漢字で記せ。

問八 傍線部⑦「さらに物いはず」を現代語訳せよ。

問九 傍線部⑧「さらば福の神で御座ある。おいとま申し参らす」という与三郎の言葉を聞いた亭主は、一層不愉快になったと思われる。その理由を三十字以内で説明せよ。

問十 『醒睡笑』の編者安楽庵策伝(一五五四～一六四二)は、安土・桃山時代から江戸時代にかけて生きてきた人である。次のア～オの中から、江戸時代の文学者ではない人を一人選び、記号で答えよ。

- ア 近松門左衛門      イ 松尾芭蕉      ウ 曲亭馬琴      エ 井原西鶴      オ 幸田露伴